多義構造の分析モデルの修正と応用

三　好　準之助

要　旨

目次

1.　分析モデルの修正
1.1.「定義」の位置づけ
1.2.　対応語
1.3.　スキーマに含まれるスロット
2.　身体部位〈口〉の対照的多義分析（改訂版）
2.1.　分析モデルの訂正と確認
2.2.　日本語「口」の多義構造
2.3.　スペイン語 boca の多義構造
3.　身体部位〈鼻〉の対応語の多義構造
3.1.　定義
3.2.　日本語の対応語とその多義構造
3.3.　スペイン語の対応語とその多義構造
4.　結び

筆者は日西両語の身体部位名詞の対照研究を行うための分析モデルを当論集の前号（38 号）に発表した（三好 2008）。本稿ではそのモデルを修正する。まず「比較の第三項」として特定の身体部位の定義（概念）を提示し，定義に対応する名詞（対応語）をそれに関連付け，対応語の多義構造を認知意味論的に分析することにした。そして身体部位〈口〉の日西両語における対応語の多義構造を分析しなおした。さらに，同様のモデルを使用して〈鼻〉という身体部位に関する日西両語の対応語を分析してみたが，その結果，両言語の対応語の多義構造におけるいくつかの興味深い事柄が明らかになった。

他方，辞書では多義語の語義が相互の関連もなく羅列されていることが多いが，このような認知意味論的な多義構造の提示方法を採用すれば，それぞれの語義を互いに関連する構造体の部分として把握することができる。さらに，一定の概念（定義）に対応する語を 2 種類の言語から選んでそれぞれの意味の構造図を示せば，両者を視覚的に比較対照してその違いを提示することが可能になる。それが本稿の分析モデルの利点となるであろう。

キーワード：多義語，対照研究，認知意味論，基本義，拡張義

筆者は日本語とスペイン語の語彙の対照研究の一環として，比喩表現の仕組みに注目しつつ多義語の意味分析を試みることにした。分析にかかる前に，認知意味論の考え方を援用して多義分析のためのモデルを考案した。分析対象の多義語は人間に共通の意味分野に対応する身体部位名詞を選ぶことにし，この論集の前号（38 号）にてそのモデルを紹介し，またそのモデルを使って身体部位の〈口〉に相当する多義語である日本語の「くち・口」とスペイン語の boca の多義構造を分析し，日西両語の多義の仕組みを比較した（三好 2008）[1)]。

しかしながら分析モデルにも分析方法にもいくつかの問題のあることが判明した。本稿ではまず，分析モデルを修正し（第１節），修正モデルに従って，すでに分析を試みた身体部位の〈口〉に相当する日本語とスペイン語の名詞の多義構造を再分析する（第２節）。さらに，その修正分析モデルを使用して身体部位の〈鼻〉に相当する日西両語の名詞の多義構造を分析する。

１．分析モデルの修正

日西両語の対照研究の一環として語彙の多義構造を分析・比較することにし，そのために分析モデルを構築したが，旧モデルを組み立てる作業では，多義分析という面に注意を集中することで，対照研究であることが看過され，問題を含むことになった。三好（2008：28）ではその分析モデルを「対照研究に求められる『比較の第三項』であると仮定して多義分析を行ってきた」と述べている。そのモデルは認知意味論的な考え方に従って，多義語の基本義に相当するスキーマを設定し，そのなかに，基本義のいくつかの意義特徴に相当するスロットを置いた。そのスロットＩには，辞書で記述されている定義に相当する情報を当てることにしていた。辞書の情報をすべてスロットのなかに含めようとしたからである。分析モデルは両言語の分析対象語を扱うときの共通の枠組みにはなるが，しかし「比較の第三項」そのものにはならない。「比較の第三項」は両言語の分析対象語に共通する，語の指示内容，すなわち定義（特定の概念）そのものでなくてはならない。そこで旧モデルを以下のように修正することにした。

1.1.「定義」の位置づけ

辞書の見出し語の第１義は，その語の意味的な指示内容であることが多い。旧モデルではそれを「定義」と呼んだ。この情報は「比較の第三項」になるものであるから，新モデルではスキーマからはずし，分析モデル（多義構造図）の先頭に位置づけなくてはならない。そして新モデルの「定義」は，基本的には百科事典的な情報の総体として扱うが，対照研究を目指すことで，その内容は必要最小限の情報に限る。なお，身体部位は人類に共通の概念となりうるので，その定義づけには客観性が期待できる。

1.2. 対応語

「対応語」とは，特定の定義に対応する，対照分析の対象である２言語に含まれる語のことである。新モデルでは，まず定義が与えられ，それに対して２言語のなかから対応語が選ばれて指定される。

身体部位は人間として生物学的に共通する認識の対象であるから，特定の身体部位（定義）に関して比較対照する２言語に含まれる対応語（身体部位名詞）は，その基本義において意味的に等価である，という前提に基づいて分析を行う。２言語には文化の違いがあるので，対応

語はそれぞれの基本義から独特の認知過程を経て拡張義が派生し，結果として別種の意味構造をもった多義語になるはずである。

定義の内容によれば，一方の言語では対応語が１語であっても別の言語では複数の対応語になる可能性もあろう。別の言語の複数の対応語のあいだに見られる意味的な関係はいくつかあるだろうが，その関係のひとつに，基本語が１語で，その語の指示する身体部位がいくつかの下位区分された部位を含んでいて，その部位の名詞が残りの対応語になっている場合がある。三好（2008：27）で指摘されているように，〈口〉のスペイン語の対応語の場合がそうであった。この定義の対応語では，〈口〉が含んでいる部位，すなわち「包括部位」のスロットの内容として〈舌〉や〈口蓋〉があるが，それが対応語の「機能」の一部を果たしている（それぞれ「発話機能」と「味覚機能」）。新分析モデルとしては，そのような包括部位名詞を「副対応語」として扱うことにする。

副対応語は基本的な対応語の下位に置き，スキーマの中では破線で囲み，おなじく破線でスキーマの外に出して別種のスキーマを設定する。それを副スキーマとする。そして必要があれば副スキーマから拡張義の存在を指摘する。しかし本稿の目的はあくまで基本的な対応語の多義構造を日西両言語で比較対照することであるから，副対応語については，この比較対照を理解するうえで参考になる二次的な情報として扱い，その語義も拡張義も簡略化して提示することにする。

1.3. スキーマに含まれるスロット

新モデルではスキーマが含んでいるスロットとして，当該の身体部位が示す「形状」（スロット I），それが人体で占める「位置」（スロット II），それが果たしている「機能」（スロット III），それが提示する「様態」（スロット IV），それが含まれている上位区分の身体部位である「被包括部位」（スロット V），それが含んでいる下位区分の部位である「包括部位」（スロット VI）を想定する（包括部位と被包括部位の名称は旧モデルと異なる。このように改めた）。しかし分析対象の定義によってはさらなる意義特徴を加える必要が生まれるかもしれない。そのため，スロット VII として「その他の特性」を加え，そのような事態に備えることにした。

そこで新たな分析モデルは，図１のように，まず定義があり，それへの対応語が続き，つぎに，その基本義のスキーマが設定されることになる。

なお，本稿で分析する多義語の語義は，一般的な辞書で語義として確立している意味だけに限っている。辞書の情報を手がかりにして共時的な多義の構造を分析するものであることをお断りしておく[2)]。

図１　身体部位名詞の多義構造図（改訂版）

２．身体部位〈口〉の対照的多義分析（改定版）

三好（2008）の分析モデルに従って行った多義構造の分析には問題が含まれていた。それを訂正し，新たなモデルに従って再分析してみよう。

2.1. 分析モデルの訂正と確認

A．定義：旧稿ではスキーマに入れた「定義」をスキーマから出して多義構造図の先頭に位置づけた。内容は暫定的なものであるが，「人間の飲食物の取り入れ口。頭部の下にあり，唇・歯・舌・口蓋などを含む。消化の一部を担当。発声器官ともなる」とした。対照される日西両語に共通する。分析対象は動物全般の〈口〉ではなく，人間のものに限定していることも明記しておく。

B．スキーマ：旧モデルと同じく対応語の基本義であり，そこにはしかるべき意義特徴がス

ロットとして含まれている。

C．スロット：旧モデルと同じく，意義特徴となるスロットの内容は言語によって異なる可能性がある。内容は，それぞれの言語で当該の対応語の基本義から派生している拡張義の意味内容を手がかりとして決めることができる。

D．スロットの「位置」と「機能」の内容：〈口〉が食べ物の入り口であり，声・息の出口でもあるという特徴は，旧モデルでは「位置」のスロットの内容にした。「食べ物」や「声・息」にしてみれば〈口〉はその出口の位置を占めている。しかし口自体が身体のなかで占める位置ではない。この特徴は瀬戸（2007：619）に従って〈口〉の機能の一部であるとし，「機能」のスロットのなかに移動することにした。

E．拡張義：拡張義の判定は三好（2008）の分析の結果の通りである。

F．副対応語：〈口〉の定義に含まれている機能の一部を，〈口〉の包括部位が担っている可能性がある。〈舌〉，〈口蓋〉などである。これらの部位を指す名詞は副対応語として扱われよう。

以下に身体部位〈口〉に対応する日本語の「口」とスペイン語の boca の多義構造を，あらたなモデルに従って分析した結果を図示してみよう。なお，両言語の多義構造を比較することで判明する諸点については，前稿の三好（2008）にゆずることにする。

2.2. 日本語「口」の多義構造

「口」の多義分析についても，三好（2008）を何点か訂正し，新たな分析モデルによってその多義構造を提示する。

A．「刀剣を数える語」：スロット IV「様態」から換喩で派生した語義「摂取のひと口分」から，二次的に隠喩で派生したと解釈できる語義「刀剣を数える語」は，漢字では「口」であるが，その意味の場合には音読みである可能性があるので，今回の分析ではその対象にしないことにした（cf. 三好 2008：30 の注 19）。

B．副対応語：日本語では「口」が包括している身体部位（包括部位）のなかで，「口」の定義のなかの機能の一部を担っている可能性のあるのは，「舌」であろう。「大辞林」と「広辞苑」（参考文献のなかの「語義設定のために参照した辞典」を参照のこと。以下でも語義設定のために参照した辞典は略語を使用する）では 2 種類の拡張義が示されている。ひとつは「舌に似た形のもの」である。「新明解」，「明鏡」，「岩波」では具体的に「リード」の意味に限定されている。もうひとつは「大辞林」で「ものを言うこと。また，その言い方。くち」，「広辞苑」では「しゃべること。弁舌」となっている。この意味に関しては，「明鏡」では「人間では発声器官の一部としてさまざまに動いて発声を調整する」とあるし，「新明解」では「言葉を発音するのに使う」とある。機能の一部が焦点化による多面的多義となっているのだが，語義として確立している拡張義であると判断する[3)]。

副スキーマからこれら 2 種類の拡張義を示すことにしよう。

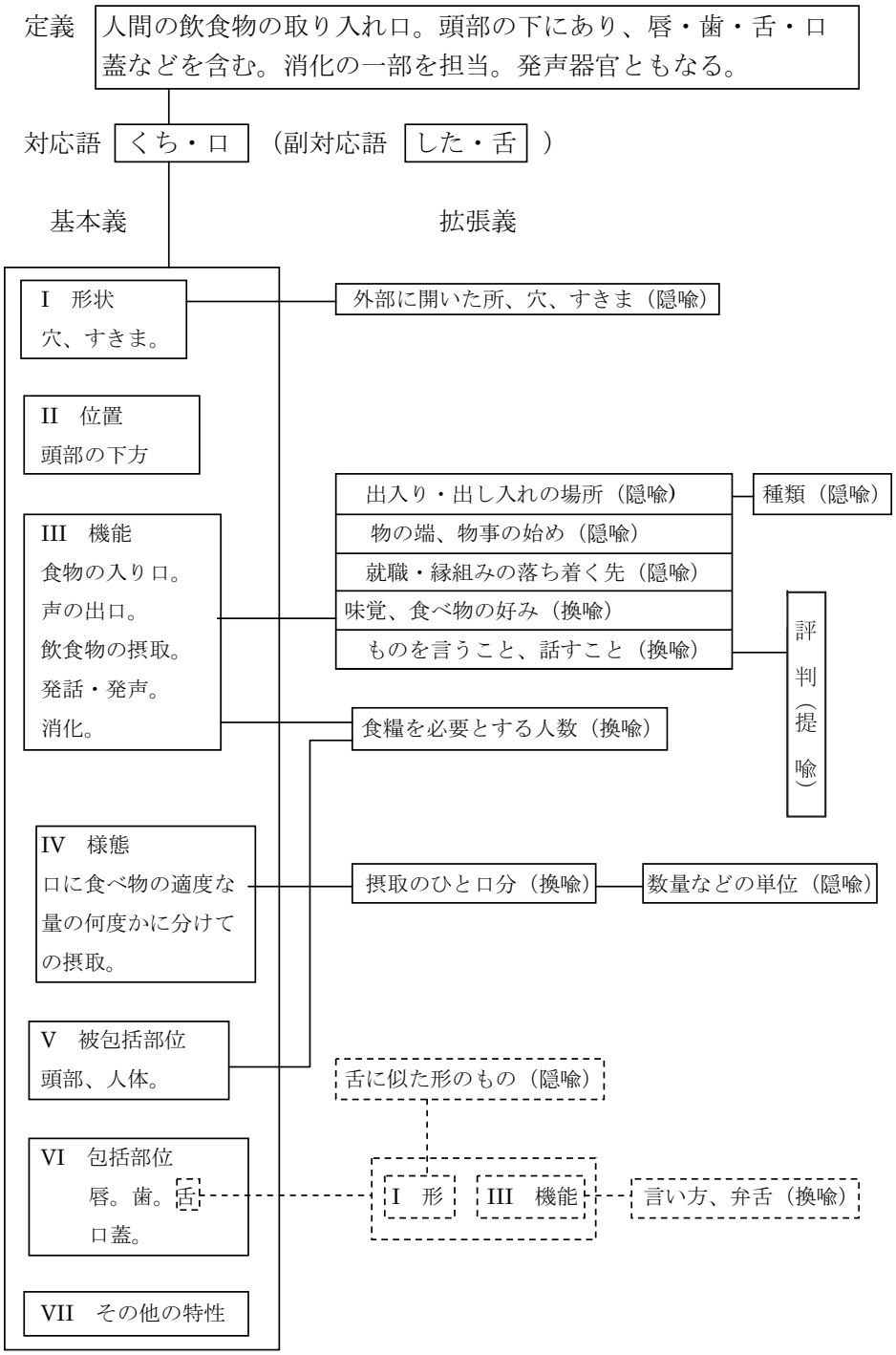
定義
人間の飲食物の取り入れ口。頭部の下にあり、唇・歯・舌・口蓋などを含む。消化の一部を担当。発声器官ともなる。
対応語
くち・口
（副対応語
した・舌
）
基本義
拡張義
I　形状
穴、すきま。
外部に開いた所、穴、すきま（隠喩）
II　位置
頭部の下方
III　機能
食物の入り口。
声の出口。
飲食物の摂取。
発話・発声。
消化。
出入り・出し入れの場所（隠喩）
種類（隠喩）
物の端、物事の始め（隠喩）
就職・縁組みの落ち着く先（隠喩）
味覚、食べ物の好み（換喩）
ものを言うこと、話すこと（換喩）
評判（提喩）
食糧を必要とする人数（換喩）
IV　様態
口に食べ物の適度な量の何度かに分けての摂取。
摂取のひと口分（換喩）
数量などの単位（隠喩）
V　被包括部位
頭部、人体。
舌に似た形のもの（隠喩）
VI　包括部位
唇。歯。舌
口蓋。
I　形
III　機能
言い方、弁舌（換喩）
VII　その他の特性

図2

C．スロットIII「機能」の拡張義の「食糧を必要とする人数」：この拡張義には〈口〉を含んでいる身体部位がかかわっている。すなわちスロットV「被包括部位」のなかの「人体」が関連している。そのことを実線で表示することにした。

D．同じくスロットIII「機能」から拡張した「ものを言うこと，話すこと」：この語義から二次的に「評判」という語義が拡張している。その拡張の仕組みは，三好（2008）では類似関係であると解釈して隠喩としたが，類と種の関係であると解釈するほうが合理性が高いことに注目して，それを提喩に変えた。

2.3. スペイン語 boca の多義構造

身体部位の〈口〉に対応するスペイン語 boca についても，本稿の 2.1. の訂正と確認にのっとり，三好（2008）で提示された多義構造を，つぎの諸点を考慮して図 3 のように改めた。

A．拡張義：拡張義については三好（2008）と同様である。

B．副対応語：boca の場合，1.2. で言及したように，この対応語には「包括部位」のスロットの内容として〈舌〉や〈口蓋〉があるが，この 2 種類の身体部位が，boca の定義に含まれている「機能」の一部を果たしている。〈舌〉に対応する lengua は「発話」の機能を，〈口蓋〉に対応する paladar は「味覚」の機能を担っている。しかしこの両者の機能は，スペイン語の段階で認知されたというよりも，スペイン語の前の段階である古典ラテン語で認知されていた機能である。

lengua の語義は，「クラベ」では「器官としての舌」，「舌と形が似ているもの」，「記号体系としての言語」の 3 種類が挙げてある（これらの語義は，語義設定のために参照したほかのスペイン語辞書にも記述されている）。最初の語義は基本義に相当し，その他の 2 語義は拡張義である。そして國原の辞書で古典ラテン語でのその語源形である lingua[4] の語義を調べてみると「1. 舌，発声器官　2. ことば，国語，方言　3. 発言，話，発声，声　4. 弁舌の才，雄弁　5. 岬」とある。古典ラテン語の段階ですでに，〈舌〉が持っている発話機能から換喩によって「言語」に相当する語義が拡張しているし，その形状との類似から隠喩によって「岬」という語義も拡張していることがわかる。

このような事情は paladar にも見られる。この名詞は現代スペイン語では，たとえば「サラマンカ」の場合，基本義の「身体部位としての口蓋」と拡張義の「感覚器官としての味覚」と「知的・芸術的な表明を評価する鑑賞力」の 3 種類が挙げられている（これらの語義は「モリネル」，「アカデミア」，「ラルース」にも記述されている）。そしてその語源形である古典ラテン語の palatum[5] には，國原によると「1. 口蓋（味覚と発声の器官）2. 味覚，嗜好，趣味　3. 青天井，青空，天空」の語義が挙げられている。現代スペイン語では 2 番目の語義「味覚」を古典ラテン語から受け継いだが，その語義からさらに 3 番目の語義「鑑賞力」という意味が隠喩で拡張したと理解することができよう。

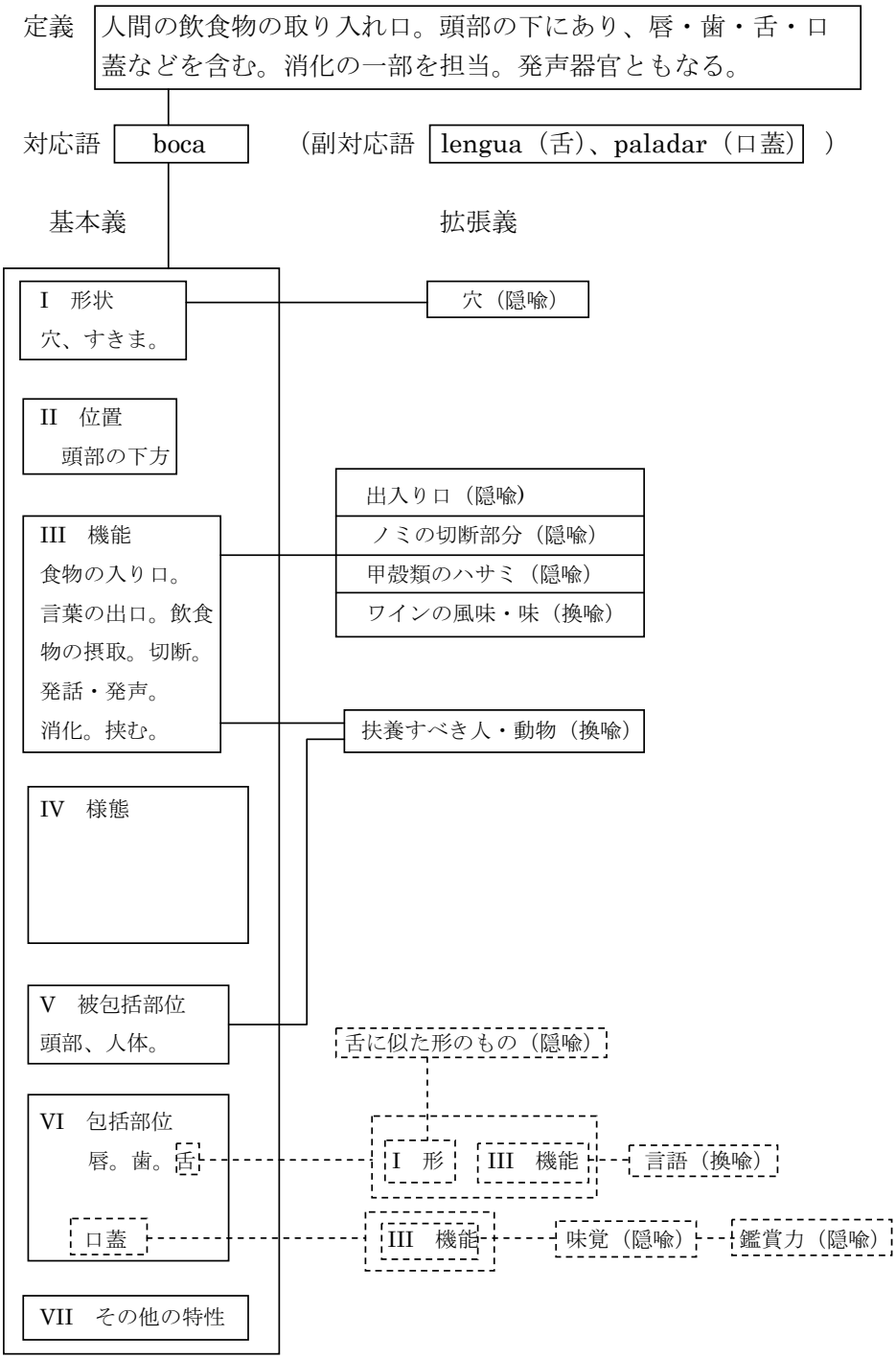
定義
人間の飲食物の取り入れ口。頭部の下にあり、唇・歯・舌・口蓋などを含む。消化の一部を担当。発声器官ともなる。
対応語
boca
（副対応語
lengua（舌）、paladar（口蓋）
）
基本義
拡張義
I　形状
穴、すきま。
穴（隠喩）
II　位置
頭部の下方
III　機能
食物の入り口。言葉の出口。飲食物の摂取。切断。発話・発声。消化。挟む。
出入り口（隠喩）
ノミの切断部分（隠喩）
甲殻類のハサミ（隠喩）
ワインの風味・味（換喩）
扶養すべき人・動物（換喩）
IV　様態
V　被包括部位
頭部、人体。
舌に似た形のもの（隠喩）
VI　包括部位
唇。歯。舌
口蓋
I　形
III　機能
言語（換喩）
III　機能
味覚（隠喩）
鑑賞力（隠喩）
VII　その他の特性

図３

3．身体部位〈鼻〉の対応語の多義構造

新分析モデルに従って，新たな身体部位名詞の多義構造を分析し，比較対照してみよう。日本語の対応語に問題のある例を扱う。「比較の第三項」となる概念は身体部位の〈鼻〉である。この定義の対応語の多義構造を明示してみる。分析の対象になる語義は主として，参考文献の中の「語義設定のために参照した辞典」のものである。

3.1. 定義

まず，語彙の対照研究の「比較の第三項」となる定義であるが，本稿では便宜上「広辞苑」の見出し語「はな・鼻」の第1義を定義として参考にする。そうすると「人間の顔の中央に隆起し，呼吸・嗅覚をつかさどり，発声を助ける器官」となる。

ちなみに，スペイン語での対応語である nariz（複数形 narices）の定義を「アカデミア」の見出し語 nariz の第1義で見ておこう。

> “Facción saliente del rostro humano, entre la frente y la boca, con dos orificios, que comunica con el aparato respiratorio. U. t. en pl. con el mismo significado que en sing.”.
>
> 「人間の顔のなかの，額と口のあいだにある突き出た形のもので，2個の穴が開いていて，呼吸器につながる。複数形でも単数形と同じ意味で使われる」

となっている。本稿の定義には「2個の穴が開いている」ことを加えておこう。すると「比較の第三項」となる概念（定義）は暫定的に「人間の顔の中央に隆起し，2個の穴が開いていて呼吸・嗅覚をつかさどり，発声を助ける器官」とする。

3.2. 日本語の対応語とその多義構造

上記の定義に対応する日本語は「はな・鼻」である。しかし日本語の対応語の指定については，それが多義語であるのか複数の同音異義語であるのかという問題がある。辞書の記述の仕方によれば3種類の見出し語が対応する可能性があるからである。「はな・鼻」，「はな・洟」，「はな・端」である。本稿では，あくまで作業仮説としてではあるが，これら3種類の見出し語は全体で，身体部位の〈鼻〉に対応する「鼻」の基本義とその基本義からの拡張義で構成される多義構造をなしている，と仮定して分析を行うことにする。「広辞苑」には見出し語「はな・鼻」の上記のような第1義の文頭に「(端ハナの意)」という断り書きがあるし，他方，「岩波」では見出し語「はな・鼻」の第2義が「鼻から出る粘液」であるが，その語義に関して「洟とも書く」という注記が付されているし（「新明解」も同様），「岩波」の見出し語「はな・端」には「鼻とも書く。同語源か」という注記が加えられているからである。

A．分析対象の語義

語義設定のために参照した５種類の辞書の情報をまとめてみると，分析対象になる語義は以下のようになる。客観的に認められている現代語の語義を分析したいので，５種類の辞書のうちの３種類以上に記述されている語義を選んで分析することにした。５種類のどの辞書も第１義が定義になっている。それが基本義である。第１義を除外して，以下の語義が分析対象になる[6)]。

① 「はな・洟」：「鼻水」とも「鼻汁」とも呼ばれるものである。「大辞林」，「広辞苑」，「明鏡」では「はな・鼻」とは別の見出し語として扱われているが，「岩波」では「鼻」の第２義として，「新明解」では「鼻」の第３義として提示されている。身体部位を指す「鼻」との隣接関係で拡張した意味である（換喩）[7)]。

② 「物の突き出た部分，先端，はし」：５種類の辞書ではどれも「鼻」とは別の見出し語「はな・端」に２種類の語義が記述されているが，そのうちのひとつである。「岩波」では「鼻」の３番目の語義ともなっている。定義には「顔の中央部に隆起し」とあることで分かるように，「鼻」は突き出ているし，人間が前を向けばその先端の位置を占めることになる。辞書の用例としては「大辞林」に「突堤のはなに船をつける」が，「岩波」に「山のはな」が挙げられている。本稿の解釈では，この語義は「鼻」の形状と位置の類似関係によって拡張した語義であることになる（隠喩）[8)]。

③ 「物事の初め，始まり，最初」：５種類の辞書の見出し語「はな・端」に提示されている２番目の語義である。この語義は上記の②から拡張したものと解釈することができる。すなわち，具象物指示（〈先端〉）から時間関係の意味である抽象概念の指示（〈最初〉）に，その類似関係から隠喩の仕組みで拡張したのであろう。二次的な意味拡張である。瀬戸（2007：６）では特性類似に当たる[9)]。

B．その他の語義

① 「嗅覚」：「明鏡」だけが見出し語「はな・鼻」の第２義としてこの意味を提示している。用例は「鼻が利く」である。しかし「大辞林」，「広辞苑」，「岩波」ではこの用例が第１義（定義）のところで紹介されていて（「広辞苑」では「（嗅覚が鋭い意から）わずかな兆候から役に立つ事柄を見つけ出す能力を持っている」と説明されている），「嗅覚」という意味が語義のひとつになっていない。本稿ではこの意味を，「鼻」の基本義の中の意義特徴「機能」の一部が多面的多義のひとつとして焦点化された意味であり，語義としての確立の度合いが低いと解釈することにする（注３参照）。

② 「鼻の穴（の中）」：この意味は５種類の辞書のなかで「新明解」だけが，見出し語「はな・鼻」の第２義として掲載している。用例は「鼻に掛かった声/鼻［＝鼻くそ］をほじる」である。〈鼻の穴〉は「鼻」が包括している部位，すなわち意義特徴のスロット VI「包括部位」のひとつになるから，身体部位の一部である〈鼻の穴〉をその部位全体を指す「鼻」

で指し示すことになる。部分を全体で指す換喩の仕組みによって成立する語義である。しかし語義としては客観的に認定されていない。

③「(男が自分を指して）私」:「大辞林」と「広辞苑」にはこの意味が第２義として記述さ

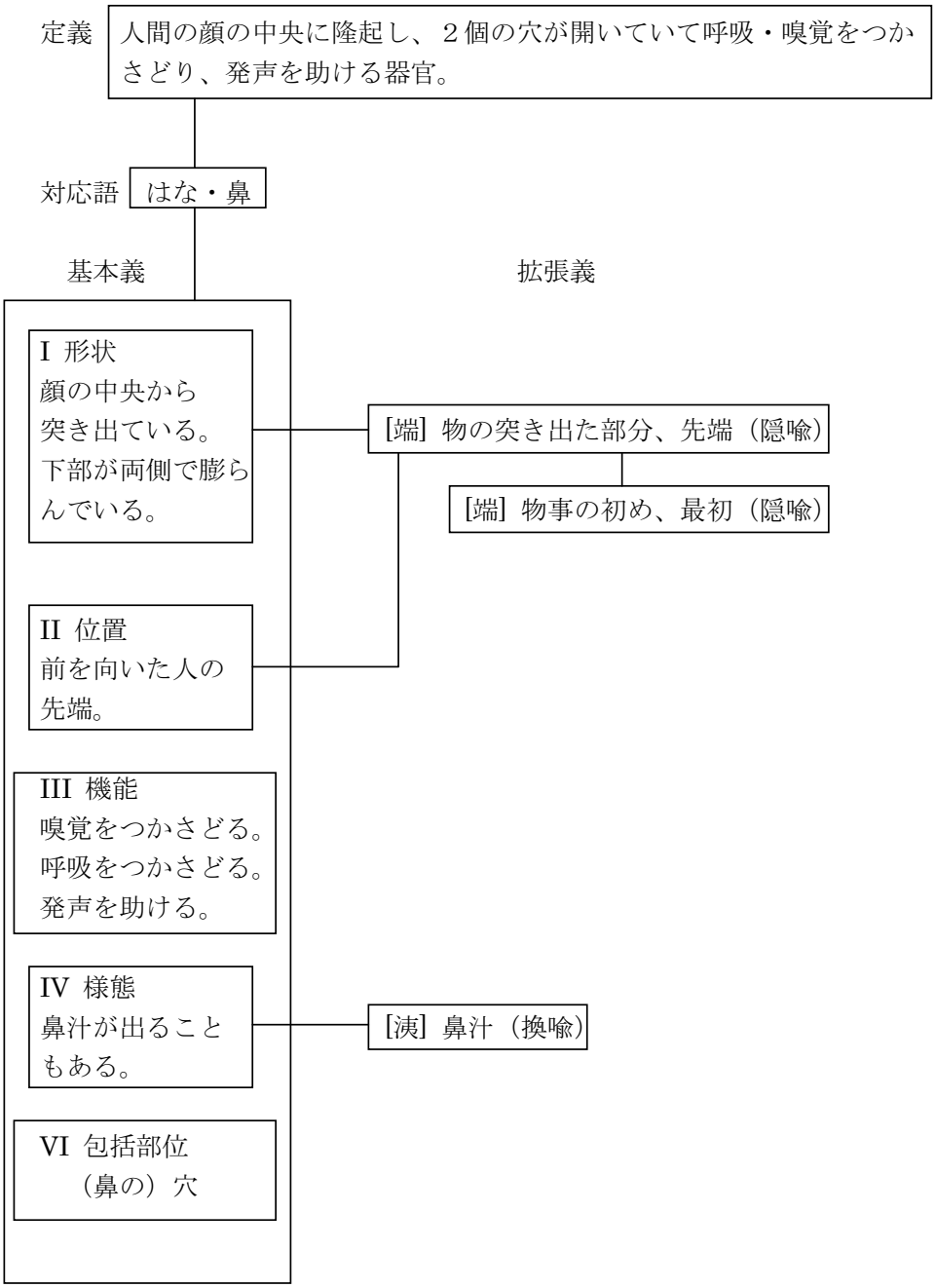

図４　日本語「鼻」の多義構造図

れている。この語義はほかの3種類の辞書には出ていないし，松村の古語辞典には出ていることから，古語であると判断し，分析の対象からはずすことにした[10)]。

④ 「鼻歌（の略）」：この語義も「大辞林」と「広辞苑」に記載されている。しかし上記の③と同様の事情にあるので，分析の対象にしないことにした。

なお，意義特徴のスロットV「被包括部位」とスロットVII「その他の特性」は身体部位〈鼻〉の対応語の多義分析には関与しないものと判断して省略する。

以上の語義を多義構造として提示すれば図4のようになろう。

3.3. スペイン語の対応語とその多義構造

本稿3.1. 項で既に示されているように，問題の定義に対応するスペイン語はnarizである（複数形narices）。語義設定のために参照したスペイン語の辞書6種類において，対応語については問題がなかった。

基本的な語義を客観的に認定する目的で，参照した6種類のスペイン語辞書のうちの4種類以上に記載されているものを選んで分析することにするが，その条件に合う語義は，「アカデミア」の記述にならって並べると以下のようになる。

① 定義に相当する身体部位の，人間に関する内容（本稿3.1. 項で紹介した定義である）。

② 定義に相当する身体部位の，脊椎動物に関する内容[11)]。

③ 「嗅覚」[12)]。

④ 「戸口や窓を閉めておくための，錠の掛け金を受ける鼻型の鉄製の器具」[13)]。

⑤ 「船などの水切りの部分や建物の風切りの部分」[14)]。

⑥ 「管などのノズル」[15)]。

⑦ 「鼻の穴」（使用頻度は低いという注記がある）[16)]。

A．分析対象の語義

上記の語義のうち，①と②は定義に相当するので，分析対象からはずす。定義として「アカデミア」，「ラルース」，「アギラル」，「クラベ」は上記のように，人間と脊椎動物を分けて記述している。

語義③「嗅覚」は参照した6種類のスペイン語辞書に語義として提示されている。五感のひとつである嗅覚を表す語としてnarizが使用されていることになる。嗅覚とは〈鼻〉の対応語であるnarizの基本義のなかのスロットIII「機能」の意義特徴のなかのひとつである。焦点化によって成立する多面的多義であることになる。そしてその意味が語義として客観的に認定されている。すなわち，拡張義として成立していることになる。そしてその拡張の仕組みは「全体を指す語で部分を指す」こと，すなわち換喩である（注3参照）。なお，英語の場合であるが，瀬戸（2007： 638−9）は多義構造を分析するのに，ひとつの中心義から意味拡張する仕

組みを採用しており，「嗅覚」という語義は「もので特性」を表現する換喩（メトニミー）で成立すると解釈している。

上記の④，⑤，⑥の語義が本稿での分析対象となる。「ラルース」では「アカデミア」と同じように3種類の語義として提示されているが，これらの語義は「アギラル」では定義に相当する第1義のなかに含まれているし[17]，「モリネル」では4番目の語義にまとめられている[18]。「ラルース」では語義⑤に相当する説明が少し具体的になり，「船や飛行機やロケットの先端部」となっている[19]。そうすると定義〈鼻〉の形状や位置の類似として，隠喩で成立する拡張義であることになる。ちなみに「モリネル」の4番目の語義はおおむね「物の輪郭や表面で，鼻やその輪郭に匹敵するような折れ目や突出部を記述するために，あるいはその形の品物を指すために，形の名称として使用される」となろう。意義特徴のスロットI「形状」の特性である鼻の輪郭との類似で拡張している意味と，それにスロットII「位置」の特性も加わって，突出している先端部との類似で拡張している意味のあることが判明する。

上記の語義⑦「鼻の穴」は，身体部位〈鼻〉が包括している部位であるから，〈鼻の穴〉を〈鼻〉の対応語（nariz）で指示するのは，部分を全体で示すことになり，換喩による比喩表現であることになる[20]。

B. その他の語義

参照した6種類のスペイン語辞書に記述されている，その他の語義について，気づかれたことを並べておこう（それらの語義には便宜上，上記の語義番号に続く番号を付すことにする）。

⑧ 「こくのあるワインの芳香」:「アカデミア」の辞書に見出し語 nariz の8番目の語義として「使用頻度は低い」という注記とともに提示されている[21]。参照したほかの辞書には記載がない。意義特徴のスロットIII「機能」（嗅覚）に隣接するものとして，換喩で拡張した意味である。

⑨ 「（複数形）勇気，気力」:「アギラル」と「サラマンカ」[22]が語義として記述している。この意味は上記の語義⑤「水切り部分，風切り部分」から，先頭に立って風や水を切り開いていくというイメージから，その姿勢との類似関係で拡張した意味であろう。二次的な拡張義である。

⑩ （複数形）先行の文の否定的意味を補強する間投詞的要素：この用法も「アギラル」と「サラマンカ」が語義として記述している[23]。これに関連する意義特徴は nariz の基本義のなかに見当たらない。慣用表現から発展した使い方ではなかろうか[24]。

⑪ 香水業界で働く専門家の「調香師（香料審査の専門家，香料調合の専門家）」：これらの語義は「アギラル」の見出し語 nariz の6番目の語義として記述されている[25]。〈鼻〉の基本義に含まれているスロットIII「機能」のなかの嗅覚が，その下位区分である「香料を識別する能力」のような意味になり（それが全体を表す nariz で表現されるときの比喩

表現のタイプは提喩），そのような能力を保持する人を nariz で指す用法は，部分（能力）を語義とする語で全体（その能力の保持者）を指しているから，換喩によって意味が拡張していることになる。

以上の情報を構造図として提示すれば以下の図５のようになる。

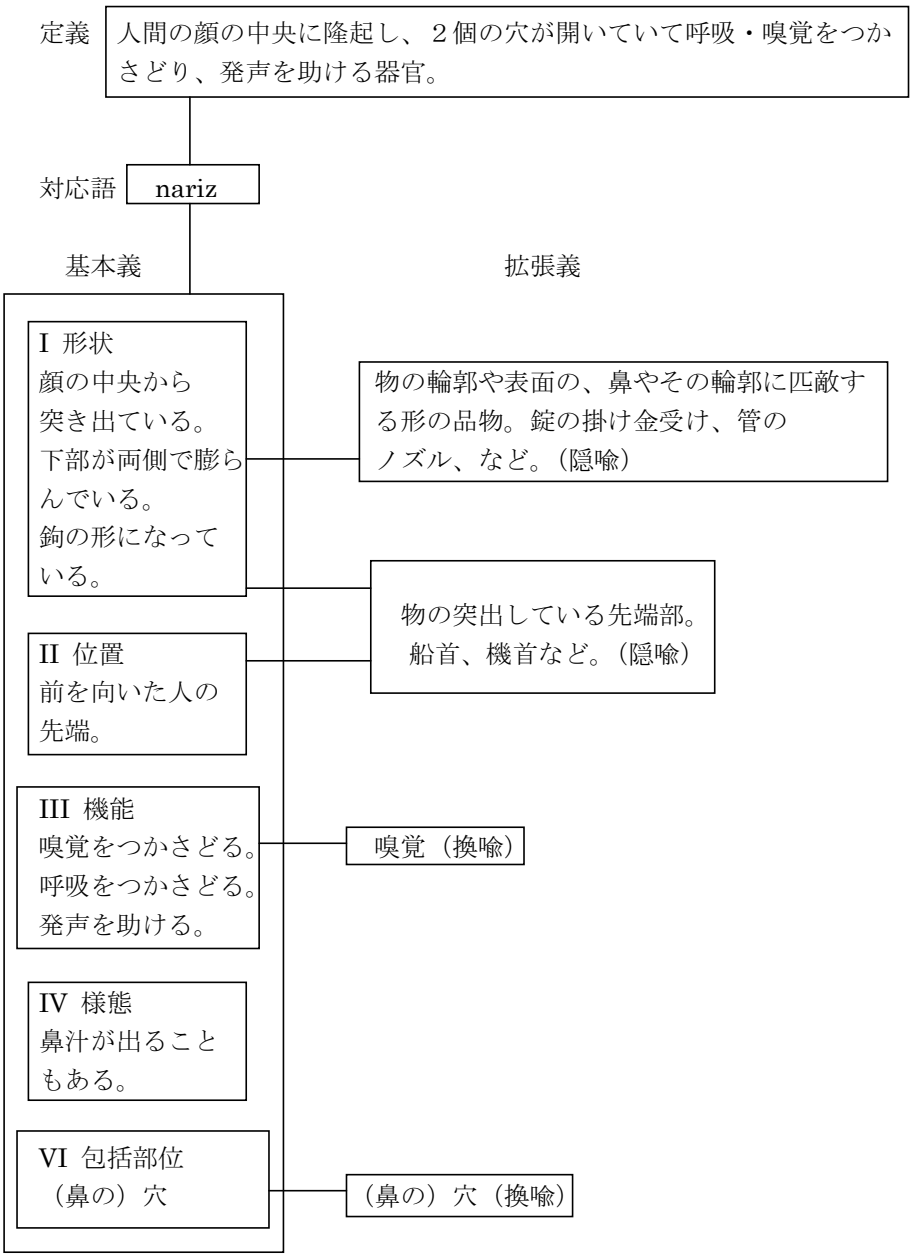

図５　スペイン語 nariz の多義構造図

3.4. 分析結果の対照

身体部位〈鼻〉の対応語を日西両語で比較対照した結果，以下のようないくつかの事柄が判明した。

A．対応語の定義：スペイン語では nariz の辞書的定義が，人間と脊椎動物とで区別されている。この言語が牧畜文化圏に属していることと関係があるかもしれない。

B．スロットⅠ「形状」：形状の意義特徴では，日西両語でその出っ張りが意味の拡張の手掛かりになっている。そしてスペイン語では，その輪郭も意識されて「錠の掛け金受け」のような拡張義が生まれている。この言語の文化圏では人間の鼻の出っ張りが日本と比べて大きい（鼻が高い）ことがその動機付けになっているのであろう。

C．スロットⅠ「形状」とスロットⅡ「位置」：日西両語ともこの 2 種類の意義特徴が組み合わさることで，色々な拡張義が生まれている。

スペイン語の語義「船首，機首」は，この日本語の表記からも分かるように，この語義に対応する事物は日本語では音読みの〈首〉で認知されている[26]。

空間的な「先端」の概念から時間的な「最初」の概念への隠喩による意味の拡張は，日本語では起こっているがスペイン語には見られない。

D．スロットⅢ「機能」：「嗅覚」という多面的多義は，スペイン語では語義として確立しているが，日本語ではその確立の度合いが低い。

E．スロットⅣ「様態」：日本語ではこのスロットから「鼻汁」という意味が拡張している。それはスペイン語では起こっていない。なお，この意味（概念）に対応するスペイン語は moco である（注 7 参照）。

F．スロットⅥ「包括部位」：〈鼻〉が包括している部位に「鼻の穴」があるが，この意味は日西両語で，対応語の基本義の意義特徴のひとつが焦点化による多面的多義として使用されている。しかしこの意味が語義として確立しているのはスペイン語であり，日本語ではその確立の度合いが低い（とはいえ注の 20 で指摘されているように，スペイン語でもその使用頻度は低いようである）。

4．結び

本稿では多義構造の分析による日西両語の身体部位名詞の対照研究を行うための分析モデルを改めた。旧稿（三好 2008）の分析モデルを修正し，「比較の第三項」として特定の身体部位の定義（概念）を提示し，それに対応語を関連付け，対応語の多義構造を認知意味論的に分析することにした。そして身体部位〈口〉の日西両語における対応語の多義構造を分析しなおした。

さらに，同様のモデルを使用して〈鼻〉という身体部位に関する対応語を分析してみたが，

その結果，両言語の対応語の多義構造におけるいくつかの興味深い事柄が明らかになった。しかし別種の課題も残っている。日本語の辞書では異なった 2 種類の見出し語の一方（「端」）を，本稿ではひとつの基本語（「鼻」）からの拡張義であると仮定して分析作業を進めた。拡張義として位置づけることに無理はなさそうであるが，その正当性の認定のためには，語彙論的な見地から通時態の情報の詳細な検討を待たなくてはならないであろう。

他方，辞書では多義語の語義が相互の関連もなく羅列されていることが多いが，このような認知意味論的な多義構造の提示方法を採用すれば，それぞれの語義を互いに関連する構造体の部分として把握することができる。さらに，一定の概念（定義）に対応する語を 2 種類の言語から選んでそれぞれの意味の構造図を示せば，両者を視覚的に比較対照してその違いを示すことが可能になる。それが本稿の分析モデルの利点となるであろう。

本稿で修正を施した新たな分析モデルも，単なる作業仮説にすぎない。どこまで有効なのか，さらなる分析を通して修正していくことにする。

注

1）なお，スキーマから拡張義につなぐ線は，旧モデルでは，拡張義が常にひとつのスロットから派生しているとは限らないという判断から，スキーマ内を破線に，その外を実線にしたが，新モデルでは作図の便宜上，すべて実線にした。複数のスロットが関与している可能性のある拡張義にはそれなりの指示を施すことにする。

2）本稿の第 1 節の記述では東信行（1981）を参考にした。「対応語」という術語は東のもの（120）である。

3）多面的多義として焦点化された意味については三好（2008）の 1.3. 項を参照されたい。焦点化によって浮かび上がる多面的多義は語義として拡張している場合としていない場合がある。問題の意味が語義として客観的に確立しているなら，拡張義であることになる。多面的多義が語義のひとつとして成立している場合，その拡張の仕組みは「全体を指す語で部分を指す」ことであるから，換喩であるとする。

4）語源の情報は Corominas に従った。

5）現代スペイン語の paladar は，Corominas によれば俗ラテン語の推定形 *palatare に由来し，この推定形は古典ラテン語の palatum に由来する。

6）なお，引用する用例では見出し語を補うことにする。

7）この意味に対応するスペイン語は moco であることにも留意されたい。このスペイン語は日本語の「鼻くそ」にも対応する。

8）日本の方言によっては海岸や河岸の突き出た陸地を「鼻」と呼ぶこともあるようである。椎名誠『大漁旗ぶるぶる乱風編』（2008：341）には壱岐島の風景の描写のところに「岬とまではいかない通称『鼻』とよばれるところを回るとたいてい漁港がある」という記述があるし，資料としての具体性には欠けるが，18 世紀後半の江戸が舞台の時代小説である浅黄斑『ごろまき半十郎』（2008：238）には「遥か奥秩父に端を発する荒川は，この千住大橋から東に見える橋場村の鼻（岬）で流れを南に転じ，大川と名を変えるのであった」とある。なお，日本大辞典刊行会の見出し語「はな·端」をみれば，（「鼻」ではないが）「端」がいくつかの地方の方言で「海へ突き出た土地。みさき」の意味で使われていることがわかる。

9）日本大辞典刊行会では，見出し語「はな·鼻」に関連する慣用句のなかに「はな先（さき）に身（み）成る」という表現があり，その意味は「胎児が人の形をなすのは鼻からであるということ」とある。

この情報も時間的な概念である「最初」の意味拡張に関与しているかもしれない。

10）日本では現在，対話中の話者が，話題が自分のことをさしているのかどうかを確認するとき，自分の鼻を人差し指でさして確認することがある。外国人には面白いゼスチャーであるが，それはこの古語の用法の名残であろう。なお，二人の中国人に尋ねたところ，現代の中国にも自分の鼻の方向に指を差して「自分」を指すことがあるようである。

11）“Parte de la cabeza de muchos animales vertebrados, poco o nada saliente por lo común, que tiene la misma situación y función que la nariz del hombre”.

12）“Sentido del olfato”.

13）“Hierro en forma de nariz, donde encaja el picaporte o pestillo de las puertas o ventanas”.

14）“Extremidad aguda o en punta, que se forma en algunas obras para cortar el aire o el agua, como en las embarcaciones, en los estribos de los puentes y en otras fábricas”.

15）“Cañón del alambique, de la retorta y de otros aparatos”.

16）“p. us. Cada uno de los dos orificios que hay en la base de la nariz”.

17）最初の語義：A f 1 c） “En determinadas cosas : Saliente puntiagudo cuya forma recuerda la de la nariz humana”.

18）4 番目の語義：“Se emplea como nombre de forma para describir una dobladura o un saliente en el perfil o superficie de una cosa, comparable a una nariz o a su perfil o para designar los objetos de esa forma”.

19）“Parte delantera de una embarcación, de un avión o de un cohete”.

20）Nariz に「鼻の穴」の語義があることは，その語源に発している。語源であるラテン語の nares には「鼻」と「鼻の穴」の語義があるからである。なお「アカデミア」と同じように，「モリネル」でもこの語義はイタリックで記述され，使用頻度が低いことが示されているし，「アギラル」にもこの語義には「使用は稀」の注記がある。

21）“p. us. Olor fragante y delicado que exhalan los vinos generosos”.

22）「アギラル」の 4 番目の語義は “（*col*）*En pl :* Valor o coraje” であり，「サラマンカ」の 3 番目の語義は “（plural）COLOQUIAL Valor, coraje” である。

23）「アギラル」の 5 番目の語義は “（*col*）*En pl y vacía de significado, se emplea para reforzar o marcar la intención desp de la frase. En constrs como* NI + *n* + NI + NARICES, *o* QUÉ NARICES”，そして「サラマンカ」の 4 番目の語義は “（plural）COLOQUIAL Se usa para negar rotundamente” である。

24）たとえば「アカデミア」の見出し語 nariz の慣用表現のなかには hinchársele a alguien las narices とその同義の inflársele a alguien las narices が含まれている。意味は，「誰かに対して鼻を膨らませる」という言い方から「うんざりする，いらだつ，立腹する」になっている。

25）語義の “B m 6 *En la industria del perfume* : Individuo experto en la identificación y clasificación de perfumes por el olfato. [...]. b） Creador de perfumes”.

26）この場合の「首」は，訓読みを調べると，「岩波」の見出し語「くび」の第 4 義「首から上の部分。あたま」に相当する。「船首」，「機首」という日本語は，その部分が魚の頭や鳥の頭のイメージと類似のものというように認知されることで生まれたのであろう。

参考文献

Corominas, Joan（2000）, *Breve diccionario etimológico de la lengua castellana*, Gredos, Madrid.

國原吉之助（2005）『古典ラテン語辞典』，大学書林。

瀬戸賢一（編）（2007）『英語多義ネットワーク辞典』，小学館。

日本大辞典刊行会（編）（1981）『日本国語大辞典[縮刷版]』，小学館。

東信行（1981）「語義の比較」，國廣哲彌（編）『日英語比較講座 第 3 巻 意味と語彙』，第 3 章，pp. 101−163。

松村明（編）（2005）『旺文社 古語辞典』，旺文社。

三好準之助（2008）「語彙の対照研究のための多義構造の記述モデル」，京都産業大学論集，人文科学系

列第 38 号，pp. 1-33。

語義設定のために参照した辞典（本文では左端の略語を使う）
日本語
岩波－西尾・岩淵・水谷（編）(2007)『岩波国語辞典』，第 6 版，岩波書店。
広辞苑－新村出（編）(2006)『広辞苑』，第 5 版，岩波書店。
新明解－山田忠雄ほか（編）(2005)『新明解国語辞典』，第 6 版，三省堂。
大辞林－松村明（編）(1992)『大辞林』，第 2 版，三省堂。
明鏡－北原保雄（編）(2002)『明鏡国語辞典』，初版，大修館書店。
スペイン語
アカデミア－Real Academia Española (2001), ***Diccionario de la lengua española***, 22.ª ed., Madrid.
アギラル－Seco, Manuel et al. (1999), ***Diccionario del español actual***, Aguilar, Madrid.
クラベ－Maldonado González, Concepción (dir.) (1997), ***CLAVE. Diccionario de uso del español actual***, Ediciones SM, Madrid.
サラマンカ－Gutiérrez Cuadrado, Juan (dir.) (1996), ***Diccionario SALAMANCA de la lengua española***, Santillana y Universidad de Salamanca, Madrid.
モリネル－Moliner, María (1998), ***Diccionario de uso del español***, Gredos, 2.ª ed., Madrid.
ラルース－Lucena Cayuela, Núria (dir.) (2001), ***Gran diccionario de la lengua española***, Spes Editorial, Barcelona.

Revised Version of Our Descriptive Model of Polysemy and Its Application

Junnosuke MIYOSHI

Abstract

We published in the former issue of this "Acta" (miscellany) a descriptive model of Polysemy for the contrastive study of polysemous words which designate the parts of human body, between Japanese and Spanish : a model composed of a scheme of basic meaning ("semema", that is, an assemblage of several "semas" as its slots ["sema" means a semantic feature]) and some extended meanings (Miyoshi 2008). In this article we revise the same model : first we present a determined concept which corresponds to a part of the human body, secondly we designate the word of each language which corresponds to the concept, and later we analyze the polysemous structure of each word. We try to present a revised version of the polysemous structure of the Japanese and Spanish words corresponding to the concept of "mouth" ("KUCHI" and "boca"). We also intend to form the polysemous structure of respective words corresponding to the concept of "nose" ("HANA" and "nariz"). With these structures formed according to our descriptive model, we can appreciate the way of connection as a whole of several extended meanings of polysemous words, presented in ordinary dictionaries as an assemblage of components separated from each other. We would like to insist on the fact that our descriptive model, framed by means of cognitive semantics, can enable us to visually understand the polysemous structure.

Keywords : polysemous word, contrastive study, cognitive semantics, basic meaning, extended meaning